平家物語　剣巻

同年の夏のころ、頼光瘧病を仕出し、如何に落せども落ちず、後には毎日に発りけり。発りぬれば頭痛く、身ほとぼり、天にも著かず地にもつかず、中にうかれて悩まれけり。かやうに逼迫する事、三十余日にぞ及びける。或時又大事に発りて、少し減につきて、醒方になりければ、四天王の者共看病しけるも、皆閑所に入りて休みけり。頼光少し夜深方の事なれば、幽なる燭の影より、長七尺ばかりなる法師、する〳〵と歩み寄りて、縄をさばきて頼光につけんとす。頼光是に驚きてがばと起き、何者なれば、頼光に縄をばつけんとするぞ、悪き奴かなとて、枕に立て置れたる膝丸おつ取りて、はたと切る。四天王共聞きつけて、我も〳〵と走り寄り、

何事にて候ふと申しければ、しかじかとぞ宣ける。灯台の下を見ければ、血こぼれたり。手々に火を炬して見れば、妻戸より簀子へ血こぼれけり。此を追ひ行く程に、北野の後に大なる塚あり、彼塚へ入りたりければ、即ち塚を掘り崩して見る程に、四尺許なる山蜘蛛にてぞありける。搦めて参りたりければ、頼光安からざることかな、是ほどの奴に誑され、三十余日悩さるゝこそ不思議なれ。

大路に曝すべしとて、鉄の串に指し、河原に立てゝぞ置きける。是より膝丸をば、蜘蛛切とぞ号しける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『平家物語』永井一孝 校